

序

惟うに、寺観というものには夫々に形容し難い重みがあり、それは物云わずとも自らその時代時代に培われた信仰の結実を物語っています。即ち、法燈を継承する歴代上人の如法弘通の法勲と檀信徒篤信の弛まざる丹精の誠がそこに籠められているからでありましょう。檀信徒の所謂先祖代々と総称される精霊も、寺と共に歩んできたことに他ならず、寺の歴史は即ち檀信徒の歴史でもあります。そして、この緇素一如の歩みこそ寺檀にとっては何物にも代え難たい貴重な寺宝ではないかと存じます。

今般、現董第二十五世田口信之上人の発願により、法華寺の四百余年を有する由緒深き寺史が法華寺誌として編纂されることは、是に時宜を得たものであり、これが編集委員会の手になり刊行されますことは、是に意義深きことと慶賀に堪えません。加え、この刊行が宗祖日蓮大聖人立教開宗七百五十年慶讃記念の一環として成されることは、宗祖並びに御開山日什大正師御報恩に照して、無比の快挙であると深く感銘し、茲に謹んでその浄業を讃え序を呈します。

平成十年八月十三日

日蓮宗宗務副総長 渡 邊 一 之

(横浜本長寺小住)